

鎌倉新仏教における涅槃經受容の一側面

——源信と親鸞・日蓮——

関 戸 堯 海

日蓮の初期の教学と浄土教批判は密接な関係を持つが、意外にも涅槃經の受容をめぐる日蓮と浄土教との間に平安時代の天台僧源信という共通項がみうけられる。そして、そのキーワードが涅槃經迦葉品の「阿耨多羅三藐三菩提は、信心を因と為すと説く。是の菩提の因は復無量なりと雖も、若し信心を説くときは則ち已に摂し尽す³」であり、この文をめぐる日蓮と浄土教、とりわけ親鸞との間に『一乗要決』という共通する支点が見出されるのである。

高木豊氏は源信と法然・親鸞の涅槃經引用を比較対照して、まず『選択本願念仏集』における涅槃經引用が皆無であることを指摘している。さらに『往生要集』で源信が涅槃經を「大經」と呼んでしばしば引用しているにもかかわらず、『教行信証』と共通する文が信巻にみえる前掲の迦葉品の信心為因の文だけであることも指摘する³。

『往生要集』の念仏往生の思想や克明な地獄の描写が鎌倉

時代の浄土教興隆に大きな影響を及ぼしていることは周知のとおりであるが、迦葉品の信心為因の文が『往生要集』と『教行信証』とに共通する唯一の涅槃經文であることは興味あることといえるだろう。しかし、この迦葉品の文は『往生要集』と『教行信証』の関係はもちろんのことから、さらに『一乗要決』と『教行信証』の結びつきを示す経文であると考えられる。

八木吳恵氏は『教行信証』行巻における一乗海釈に注目した上で、勝鬘經をめぐる親鸞の自釈ともいうべき見解が『一乗要決』大文第八を下敷きとしている点を取りあげて、親鸞の源信著作依用を『往生要集』に限る点に再考を促している³。

また神戸和磨氏は『一乗要決』大文第七（仏性差別を弁ず）にみられる源信の仏性觀をとりあげ、「一切衆生悉有仏性」の理論を可能性にとどまらせることなく、それを源信がいかに

に現実化し実証していったかについて、阿弥陀如来の救済を念頭に置きつつ検討している。

これらの指摘によって『一乗要決』と親鸞との関わりに留意せねばならない点があるが、八木吳恵氏はさらに興味深い意見を提示している。

すなわち『教行信証』信巻にみえる迦葉品の信心為因の文が『一乗要決』大文第六（無性有情の執を遮す）に引かれる経文であることを指摘している。そして、その引用の次下で源信が一闡提を信不具足とみなしている文意が、意外にも『教行信証』における信心為因の引用の次下の文意に通ずることを明して、大文第六における源信の仏性論が考慮されるべき旨を明示している。さらに『一乗要決』について「要集に於ける菩提の因としての信心強調と相俟って、信心仏性の問題が提起せられ、『一乗要決』の信心為因、一闡提を信不具足とする事の意義を考慮すべき」ことを指摘するのである。

『一乗要決』は法華經の一乗思想を闡揚すると同時に、一方で涅槃經を中心とした諸経論からの広範な引用によって、仏性の検討を詳細に行っている。この点で『一乗要決』と鎌倉新仏教とのつながりを見る時、《法華經の一乗思想を明した書》であることはもちろんのこと、《一切衆生悉有仏性の現実化をめざした書》であることに注目すべきであろう。そして、仏性論という問題に主眼を置いて見れば、迦葉品の信

心為因の文をめぐる親鸞と『一乗要決』との関わりがうかがわれるのである。

そこで次に直接『一乗要決』をみてみると、大文第六では慈恩の『成唯識論掌中樞要』をまずあげて端を発し、法宝の『一乗仏性究竟論』でそれに対せしめ、徳一の『慧日羽足』でさらに反対させ、最後に源信の私引文を引いて無性有情実有の執を破している。中でも『樞要』において慈恩が無種姓人を証す文としてあげた涅槃經・善戒經・勝鬘經などの十文一量について、それぞれに慈恩の説を論破しているが、親鸞との関わりがうかがわれる「樞要の第五文」とは、涅槃經の恒河七種衆生について検討される部分である。慧沼が恒河七種衆生の第一を畢竟無性常没闡提と力説するのに対して、源信は「常没」の語に固執すべきではないと反論している。そこには涅槃經に基づいて一闡提を信不具足とする源信の見解が提示されるが、その例証の一とされるのが迦葉品の信心為因の文である。

ひるがえって日蓮の遺文をみてみると『顕謗法鈔』と『法華題目鈔』に、迦葉品の信心為因の文を通しての源信との関わりがうかがわれる。

『顕謗法鈔』では「信」と「解」のありようと「謗法」との関係について考察されており、ここで、仏教についての知的解了がなくとも信仰心さえあれば得道をとげることができ

るとし、その証拠として法華經譬喻品の「以信得入」の文とともに迦葉品の信心為因の文が引かれている。また、日蓮は「信」と「解」のありようと「謗法」について検討するにあたって、涅槃經の恒河七種衆生をとりあげているが、涅槃經の經文にもとづいて結局、謗法であるかないかは信仰のありようによると見るのである。このような日蓮の見解は、親鸞の場合と同様、『一乗要決』大文第六における源信の解釈を下敷きとしているものと考えられる。

また『顯謗法鈔』著作の五年程後に著された『法華題目鈔』においても、法華經譬喻品の「以信得入」の文と迦葉品の信心為因の文をとりあげて、信心の重要性を力説している。そして、たとえ「さとり」があっても「信心」なきものは誹謗闡提の者であり、たとえ「さとり」がなくとも「信心」がある者は鈍根とても正見の者であると言い切っている。『法華題目鈔』のこのような見解は①著作年次 ②証拠としている法華經・涅槃經文 ③信心のない者を誹謗闡提とみなし、謗法とならないためには信仰心が必要である、という以上の①②③の点から、『顯謗法鈔』の見解を継承しているものと思われる。そしてこのことは『法華題目鈔』に示される「信心を本と為す」思想の底流に『一乗要決』があることを示しているといえるだろう。

このようにみると、源信の評価について浄土教の側か

鎌倉新仏教における涅槃經受容の一側面（関戸）

らすれば、日本の浄土教思想に大きな影響を与えたことから『往生要集』の源信にウェイトが置かれがちであったといえる。その点で『一乗要決』を再度見直す必要があるのではなからうか。また『一乗要決』をみるにあたって、序分に源信自ら「自他宗の偏党を捨て専ら権智実智の深奥を探る」と語っているように、宗派的な偏見を捨てた視点に立ち、『往生要集』との関わりばかりに目をうばわれることなく、純粹な教学書としてうけとめることを提唱したい。そのことによって逆に親鸞が源信の仏性論のどこに着目していたかがより明らかに、源信の「一切衆生悉有仏性」の具現化についての見解が、親鸞のたどりえた阿弥陀如来の救済の世界にどのように反映していたかが、より明確化するといえるのではなからうか。

また日蓮の側からみれば、源信が鎌倉時代の浄土教興隆に果たした役割に注目されがちであったため「獅子身中の虫」と厳しく批判されてきた点のみが浮き上がってきたことにより、源信との関わりはうすいとされてきた。しかし『顯謗法鈔』『法華題目鈔』は『一乗要決』の見解を下敷きとしていると思われる上、日蓮には他にも『一乗要決』の抜き書きや書写がいくつかみられるのである。

以上のように『往生要集』の著者としての源信の存在ばかりに目をうばわれてきたため、従来軽視しがちだった『一乗

鎌倉新仏教における涅槃經受容の側面（関戸）

要決』における源信の仏性論が、鎌倉時代という新場面において「信心」を媒介として浮び上ってくるのではなからうか。

そして、親鸞・日蓮が源信の「一闡提とは信不具足」とする見解に着目していることの背景には、鎌倉時代において仏教に求められた課題を示すとともに、平安天台宗から鎌倉新仏教への継承と断絶を探るてがかりの一つがあるのでなかろうか。

- 1 「大正新脩大藏經」十二卷五七三頁C。
- 2 高木豊『鎌倉仏教史研究』一〇一～三頁参照。
- 3 八木旻恵『恵心教学の基礎的研究』六四三頁参照。
- 4 神戸和麿『源信における仏性観(上・中)』《同朋大学論叢》二八・三五所収)参照。
- 5 八木旻恵前掲書五六一頁参照。
- 6 「正藏」四三卷六一二頁a。
- 7 「正藏」七四卷三五四頁b。
- 8 また八木旻恵氏は『一乗要決』大文第六と『往生要集』大文第五助念方法との関わりについて「闡提を約位とし、成仏を約束する恵心の論結は同時に浄土教学の謗法闡提廻心皆往と連結し、往生要集逆謗除取釈も想起せられる」(前掲書二二〇頁)とするが、浄土教学における五逆・謗法・闡提のありかたと、源信の仏性論との関わりについては今後検討すべき興味ある問題であるといえよう。

- 9 拙稿「源信『一乗要決』と日蓮聖人(1)」《立正大学日蓮教学研究所紀要》十三号所収)を参照されたい。

- 10 渡辺宝陽氏は恒河七種衆生理解について日蓮・善導・源信・涅槃經(南本・北本)それぞれを対照することによって、日蓮の浄土教批判の視座が五逆・謗法にあることを明確化している(『日蓮宗信行論の研究』一〇頁以下参照)。

- 11 「昭和定本日蓮聖人遺文」二七三頁。
- 12 同右三九二頁。

- 13 「正藏」七四卷三二七頁C。

- 14 日蓮の初期布教の課題と浄土教批判は密接な関係を持ち、法蔵比丘の四十八願をめぐって誹謗正法の問題が大きくクローズアップされてくる。そして日蓮が末法の誹謗正法の者こそ、救済困難な人間とする位置づけは源信の『一乗要決』の思想を継承するものである(渡辺宝陽「日蓮の初期布教の課題」《宗教研究》二六八号所収)参照。(立正大学大学院修了)

新刊紹介

代表委員 金岡秀友・奈良康明・藤井正雄・渡辺宝陽

「日本仏教典籍大事典」

B5判・五五・一六四頁・定価二八〇〇〇円
雄山閣出版・昭和六十一年十一月二〇日刊